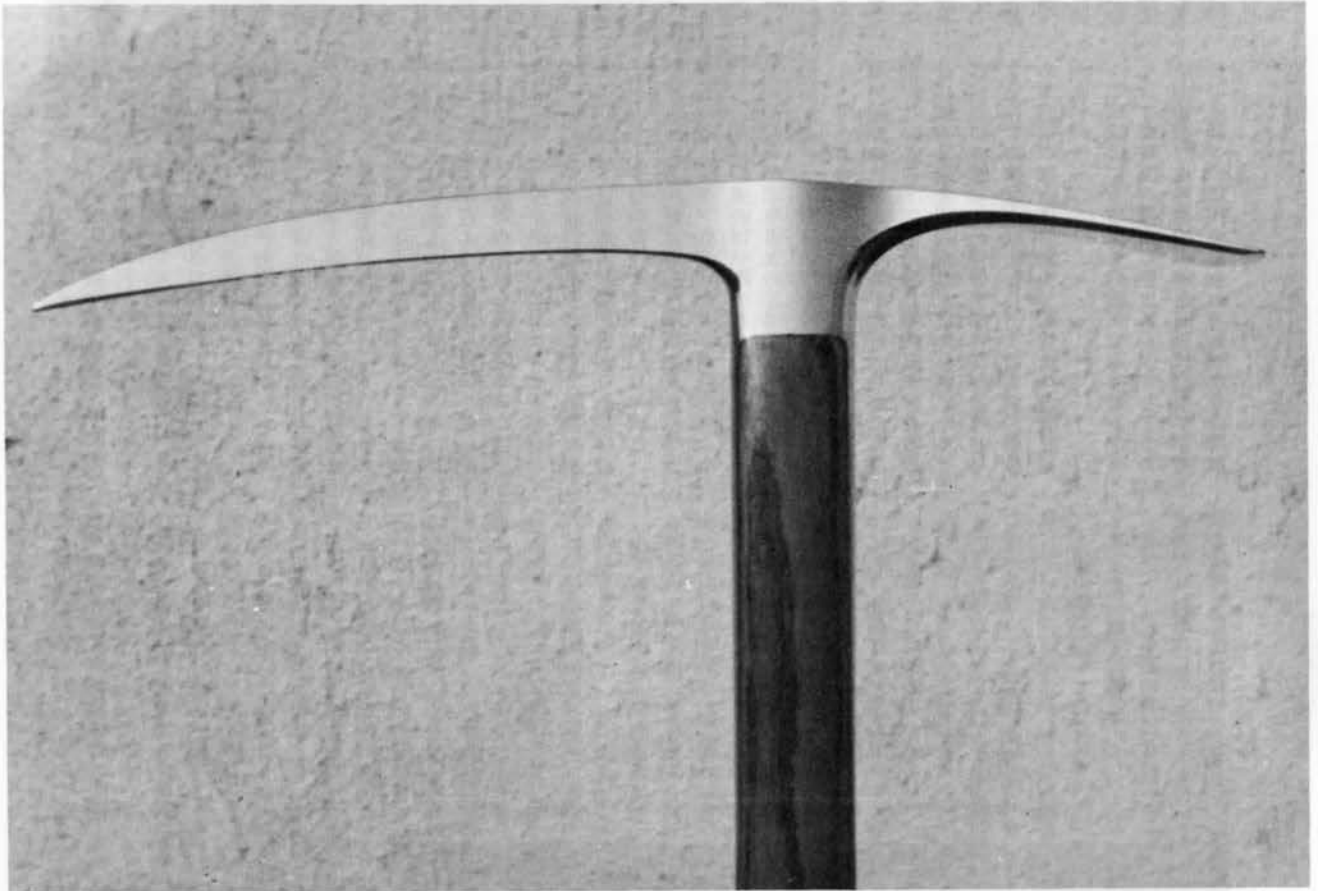


山と博物館

第32巻 第2号

1987年2月25日

大町山岳博物館



山内作 2182号

岐路

写真の二一八二番のピッケルは、昭和三九年に山内東一郎が鍛えてくれたもので、完成までに三年の歳月がながれた。その間、毎年仙台を訪ねたし、未完を詫びる手紙のかずかずを受取った。完成したピッケルは、七三番を模した山内七四歳の傑作だった。四一年四月に病没するまで、その後三本しか作られていない。二一八六番が終焉の作品だった。私が仙台の山内の自宅を訪ねた時、居間からこのピッケルを携えてきて、仕事場で私に渡してくれた。怒濤のような感動が私の心をみちました。そこでどんな話があされたのか思いだすすべもない。

ある年の十二月、私は金峰山でピッケルのトラブルを経験した。生意気盛りの腕白時代であったようだ。炊事のために、氷に打込んだピッケルが鉛のように曲がった。小屋に同宿していた人達の侮蔑を含んだ眸と酷薄な唇。あの屈辱の傷痕は今でも消えてはいない。

「山内のピッケルが欲しい」

これがその後の私の人生の岐路になったようだ。放擲した岐路の片々も、今では面映ゆい過去となった。

昭和三十七年の夏であったか。駿河台で扇型の傑出した門田のピッケルをみつけて、あとは女房の懐をということになった。この金は、初産のための乏しい彼女の預金だった。長じて息子は山に登らなくなったし、彼女を山に誘えば、雪が消えてからにするという。私は一人になった。

山内七三番には二十余年の恋をした。こゝと一作こそが唯一の山内であって、他の全作品は、このピッケルのための前奏曲でしかないと思っていた。今でもそう信じている。愛蔵していた駒草山荘主人が、それを私に委ねてくれた。昭和五八年の夏であった。

私はいま私の出遭った運命のかずかずを、心が赴くならば博物館に託そうと思っている。

*二一八四は欠番である。

(平柳一郎)

氷斧とピッケル

平柳 一郎

大町山岳博物館には標題にかかわる一級の資料がある。それは、加賀正太郎が明治四三年にスイスから持ち帰ったフリッツ・エルク(FRITZ JOERG)や、それを模倣させた高頭仁兵衛(日本山岳会創立者の一人)の古典的なピッケルだが、なかでも周布光兼旧蔵のアイスアックスの原型(日本山岳会より寄託)は超一級の資料であろう。故山崎安治の解説によれば「The Pioneers of the Alps」の中で、このアックスはヨーロッパの船大工の斧であったといわれている。十八世紀の終りから十九世紀初頭にかけて使用されていた氷斧は、この斧から多分に示唆を受けたようだ。これは、ピックとタテ型のブレードから成り、柄には平たい石突がついていて、本来の斧の使用目的より氷斧の姿に特徴がある。アルプス山麓では、羊飼いや水晶採りの農夫の間で、古くから氷河渡りのために長さ七八ヒートのポールが使われていた。強靱で単純な木の棒である。洋の東西を問わずこのような奴は、人間の第三の足としてどこにでもあったはずだ。

その後、このポールに雪氷上の安全のために石突が付けられるようになった。ヨシアス・ジムラー(1530-1576)によれば、アルプス山麓の羊飼達がこれを持って山を越え、谷を渡って羊を追ったが、スイスを訪れた旅人達が長い年月の間に、そのポールをアルペンストックと呼ぶようになっていた。

記録によれば、一七八六年八月、ソシエール(1740-1799)がモンブランに登った時、案内人の一人がヨーロッパ中世武器の戦斧ハルバード(Halberd)を持っていて、雪氷上に足場を切って一歩一歩登ったという。この戦斧は、前述船大工の斧に似ていて、その斧の先に十文字槍のような穂先が付いた鋭い長大な武器で、氷斧の原型を連想させる(註)。氷斧はアイスアックスでピッケルのことだが、一八六五年頃を境に形態上の変化があった。ソシエールの戦斧の記録から三五年後に、また新しい登山具と登山技術が生まれた。一八二二年、クリツルドがモンブランに登った時、一行は石突の付いたアルペンストックを携えていたが、氷雪上の足場切りに樵の使う手斧(ウッドアックス)を持った案内人がいて、たまたまアルペンストックの先にこの手斧を結びつけて足場を切った。(日本でも嘉門次がウエストンを穂高に案内した時、しばしば鉈で足場を切ったことは知られている)こうして偶然にも石突付の柄に斧が着けられて、氷斧の原型が誕生した。この二つの道具の結合は、登山技術の上で特筆すべき発見だった。

このように、ポールの時代からアルペンストックの時代へ進み、更にストックとアックスが結合した氷斧の推移を記録は語ってくれらる。氷斧の原型がつくられると、次には形態的な完成が求められ、合理的な追求がなされて「アルプス黄金時代」を迎えることになる。

メンヒヨール・アンデレック(1828-1912)やレスリー・スチーヴン(1832-1904)の氷斧は、アルペンストックにピッケルだけの鉄頭(アイアンヘッド)が付き、J・ベネン(1821-1864)やM・クロツ(1830-1865)のものは、タテ型の斧とピッケルを備えた所謂完成された氷斧となる。E・ウインバー(1840-1911)の氷斧にもクロツのようなタテ型のものがあつて、二五歳の頃に使われたものだが、イギリスではピックアックス(Pick axe)と呼ばれていた。これは前述周布氏の氷斧原型に酷似するものである。

氷斧の斧部がタテ型からヨコ型へ移る決定的な変化は、恐らくマッターホルン登頂以降であつたと思われる。ヨコ型の氷斧が、このようにして近代的なピッケルの呼称として一般化されることになった。

山岳博物館所蔵のフリッツ・エルクには前に触れたが、このエルクのピッケルは作者在銘の嚆矢であろう。一九世紀末頃、ようやく近代的な頭抜き(ヘッド)の誕生する。頭抜きピッケルの頭部はまだ氷斧の残影を曳いていて、金槌の柄の穴のように抜けていた。使用上からまた美観上からその穴を鉄の鋏で蓋をした。

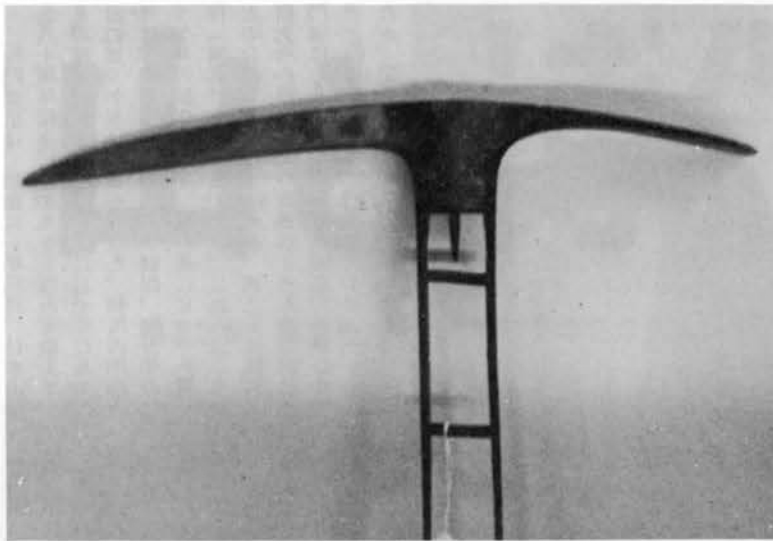
エルクに続くヘスラー、シュエンク、ウイリツシュ、ベント等のピッケルはすべて頭抜きであつた。これらのピッケルが「アルプスの鉄の時代」に使われ、その名をたかめた。こうして頭抜きピッケルは名作の代名詞とまでいわれるようになった。

写真の嘉門次小屋に伝承する氷斧は、曾孫の上條輝夫によればその由来はつまびらかでない。秘かにウエストンとの関係を期待したが、姿からこれは日本で作られたものである。石突がワンピースで、鉄頭の穴は抜けていた。模作の原ピッケルは果してどんなものであつたか。

大正二年に大木操が撮った河童橋でのウエ



嘉門次小屋伝承の氷斧(頭抜き鉄の蓋はない)



横有恒所有シエンク(頭抜の鉄の先がみえる)

八年のケルン五号によれば、尺一寸物が十六円五十銭、尺物十五円五十銭、輸入物は二十円以下では買えないといっている。

横有恒のシエンクは他にも三本をかぞえる。板倉勝宣、大島亮吉、今西寿雄に伝承するもので、このうち板倉伝承のシエンクは、山岳博物館へ日本山岳会から寄託された。

大正十三年、西岡一雄は好日山荘前身のマリヤで、多数の運動具類と共にピックケルを輸入した。ヘスラー、二代エルク、シエンク、ウイリツシユ、ベント等の名作である。この年、石川欣一がマリヤでフリツク(ERITSCHE)のピックケルをポーナスを投じて買った。十七円であった。このピックケルを持って対山館に逗留していた頃の随筆に出てくる。因みに山内のピックケルはどうだったか。昭和

ストン夫妻と嘉門次、妙義山の根本清蔵の四人の写真は広く知られている。その時師の持っていたピックケルは、ピックが上下から鋭くそがれていて、石突はツーピースだ。フリツツ・エルクに相違あるまい。記録では、明治末頃日本にはまだ二種類のピックケルしかなかったようだ。初代のエルクと幻想的なアインズイーデルン(EINSEIDELN)の町に生まれたフプアウフ(FUPFAUF)の作品である。後者は石突がワンピースで、頭はエルクよりさらに小振りのものであった。三度来日したウエストンが日本に携えたいくつかの

ピックケルを、嘉門次は案内の都度みていたはずだ。嘉門次小屋伝承の氷斧と、ウエストンのピックケルとの接点が見えてどこにあったのか。黒錆の伝承の氷斧は寡黙に口を噤んで語ってくれない。

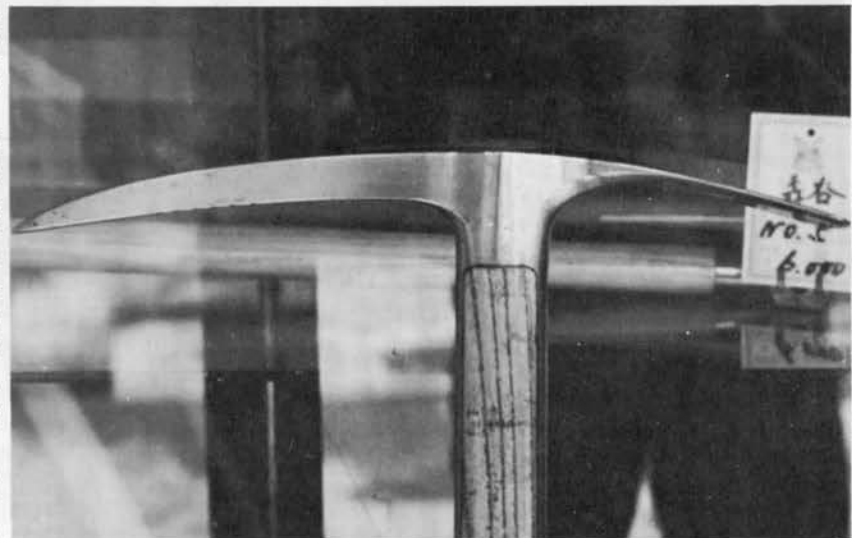
大正十年、横有恒はアイガー東山稜初登攀を果して帰国した。写真のシエンクは、その折持ち帰ったピックケルである。戦火で焼身となったが、日本渡来のシエンクの記念すべき第一号である。日本山岳会六十周年記念展示に出品されたものだが、その後の行方は杳として判らない。

この高価なピックケルを使って、わが国での登山とは一体どんなものだったのか。価格はともあれ、日本の登山の黎明期では、ピックケルそのものが特別に貴重で珍らしい道具だったのである。高頭仁兵衛や中村清太郎、そして鹿子木員信という物心共に恵まれた人達までが、模作のピックケルを今日に残して、その経緯を伝えてくれる。

このうち高頭、鹿子木のピックケルは、同博物館に陳列されて往時がしのばれる。

日本の山内のピックケルに話を移そう。山内東一郎は、大正十三年の試作を経て昭和三年に第一作を世に送った。この一号の所有は転じて、現在大阪好日山荘の大賀寿二の所有となっている。山内作は二一八六番が最終作となった。作品総数は、昭和九年頃から「四」を欠番にしているのでその概数をかぞえることができる。しかし道具類の宿命は消滅の運命をたどるものだ。恐らく七百本現存するかどうかは疑わしい。門田の生涯五万本の作数に較べて極端に少なかった。

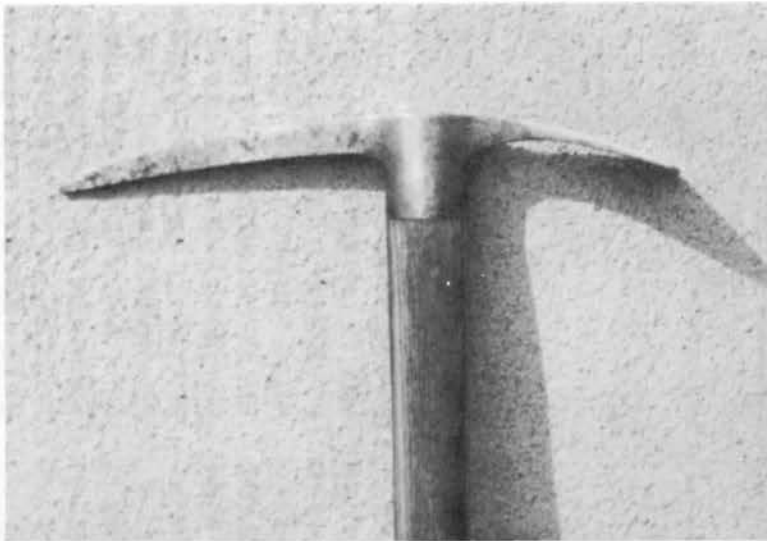
材質は当初から特殊鋼を用い、シエンクとベントをモデルとした整形優美の姿は他に比類がない。形状にも変化があった。ピックケルはブレードの型で分類されるが、初期作は銀杏型、次期の作は、琴糸を支える琴柱に似ていて、琴柱型と呼ばれている。そして昭和十年の最多作期に琴柱型から扇型へと移る。扇を少しひろげ蓋恥を含んで舞うような姿だ。



山内作713号(昭和40年頃 駒草山荘にて)

写真の七一三番は「岐路」で紹介したように、山の道具をはなれて彫塑とみまがう。こんな自己否定の道具は悲しく不幸だ。しかし、扇型はやがて終って、戦後はすべて肩の少し張った琴柱型の温和な姿となった。

スイスの山で生まれた氷斧は、やがてシエンクのような花となった。その花が日本に渡って、咲き、散っていった。山内のようなピックケルはもう生まれまい。決して二度と作られることはないだろう。



和久田弘一旧蔵 門田作1号(頭抜)

私は嘉門次の生涯を山内に重ねてみた。二人はどうしてこんなに一途の生涯をたどったのであろうか。

(日本山岳会員)
敬称は略しました

三代門田正は、昭和六年三月、日本山岳会八十周年記念ピッケルを三百余本鍛えて、その途次挫折された。ここに五七年に及ぶ門田のピッケルは終りをつげた。初代の門田直馬は、昭和四年のアイゼン試作、同五年のピッケルの試作を経て、翌六年にピッケル第一作(写真)を世に送ったが、これらは二代茂との合作であった。山内が、東北大金属材料研究所の榊田定司の指導によるものと同じく、門田にも北大工学部の和久田弘一の熱心な助言と指導があった。門田はアイゼンから始めたが、記念すべき和久田旧蔵のアイゼン一号

も同館に寄託されている。門田は戦後の数年まで扇型を守った。初期はスイス物のブレードを踏襲したが、軽量化のため二十年頃から山内のようにブレードの下端の肉置きをそぎ落した。その後三十年代はカップ型となり、四十年代にメタルシャフトを作るようになった。山内と同じように、門田にも潮時があった。昭和九年頃のものに凄まじいほどの作品がある。山内はこの門田の作柄をみている。そして門田は山内を研究していた。そうでなければ、この同じ時期に両者の火の出るような対峙はない。よきライバルは時代の配剤というべきなのか。こうして、昨年門田も消えた。門田茂が問わず語り話してくれたことがあった。ヤチダモの柄の代金を山内に求めた時、仙台大町の陋屋で、障子代りにムシロを吊して小雪を防ぎながら、コタツで冷酒を含んでいたという。そして、ここで一旦引き退るのが門田の真髄でもあった。

博物館だより

山岳資料が寄託されました

*日本山岳会より38点
今まで同会からは武田久吉資料など29件554点が寄託されていますが、新たに38点が加わりました。

内訳は、横有恒の使用品、マナスル隊の装備、板倉勝宣のピッケル、門田1号アイゼンなど登山史上貴重な資料ばかりです。

*平柳一郎氏よりピッケル4点

本号の原稿を執筆くださった平柳氏からは当館所蔵のエルクと並ぶ最古の伝来ピッケルフアウフをはじめ、シェンク、ウイリツシユの初代作、山内作の4点が寄託されました。(詳しくは次号でお知らせします)

『ライチヨウの生活』(復刻版)の頒布

残部わずかとなりましたが、一冊4千円で頒布しております。ご希望の方は山岳博物館気付の羽田健三先生退官記念事業会(☎0261-29211)へ電話でお申し込みください。



資料寄贈ありがとうございました

- 書籍 1部 大町市大黒町 船山花子
- 鉄剣 1点 大町市社 伊藤資俊
- 他 4点 大町市下仲町 前田国善
- 書籍 1点 大町市常盤下一 西山千明
- 大祓形代 1点 大町市俊町 若一王子神社
- パンフレット 6点 常盤公民館 丸山隆士
- スキー道具 1式 松川村川西 赤沢英子
- ミカドキジの羽 4点 塩尻市宗賀 塩原克広
- 色紙 1点 横浜市保土ヶ谷区 若林晴男
- 色紙 1点 渋谷区幡ヶ谷 丸山雅央
- 色紙 1点 松本市泉 古市幸科
- 色紙 1点 目黒区東ヶ丘 大工原武司
- 立大ナンドコット隊資料 4点他
- リュックサック 1点 中野区若宮 山縣一雄
- クロツグミ 1点 北九州市戸畑区 宅野 坦
- 直木重一郎の写真アルバム 2点 北沢繁美
- 志村鳥嶺資料 174点 三鷹市大沢 志村済美
- 舵取りソリ 1点 大町市旭町 縣 忠一
- シロマダラ 1点 大町市社館之内 古幡和敬
- スケッチ 2点 世田谷区池尻 高田正二郎
- 水彩画レブリカ等 9点
- テント 1点 日野市神明 漆畑廣作
- 地図等 84点 習志野市秋津 田頭 扶
- 武蔵野市西久保 熊井重次

山と博物館第32巻第2号

発行所 長野県大町市 TEL ☎0261-220011
大町市山岳博物館
印刷所 長野県大町市俊町 大糸タイムス印刷部
定価 年額一、二〇〇円(送料共)切手不可
郵便振替口座番号(長野四一)二二九九三〇